

【論文】

「ブラジル化」の概念について

酒巻 秀明*

先進国の混乱は、とどまる様相を見せない。このような先進国の混乱に対して、ウルリッヒ・ベックは、ブラジル化という考え方を用意していた。ここでブラジル化とは、先進国の社会が、ブラジルのような発展途上国の社会と類似性を示すようになってきているというもので、安定していると思われていた先進国の社会構造の中に、不安定さが広がっているということである。ベックは、ブラジル化を一般的な法則と捉えている訳ではなく、この考え方で先進国を模範とのみ見る考え方からの転換を求めている。

次に、ブラジル化の例として、マイケル・リンドによるアメリカの分析が検討の対象になる。リンドによると、アメリカは、豊かで均質的な白人上層階級とそれ以外の多数派の人々とに分割されていて、白人上層階級によって支配されている。リンドのいうアメリカの白人上層階級は、資本家ではなく、主に、経営者と専門家からなっている。白人上層階級は、公民権運動の理想をゆがめた多文化主義政策を利用して、人種間の対立をあおり、本来利害の一致する労働者階級を人種的に分断し、自らに有利な、グローバルな自由貿易や移民の推進といった政策を通していくことに成功している。その結果、リンドによると、アメリカの中産階級、労働者階級の生活水準は大きく低下し、発展途上国並みの不平等と上層階級の繁栄という不条理な状況が生じている。

キーワード：ブラジル化、多文化主義、人種対立

1 はじめに

イギリスの国民投票による EU 離脱の決定や、アメリカのトランプ大統領の誕生以来、ヨーロッパ、アメリカでは、混乱が続いている。安定していると思われていたドイツでの右派勢力の台頭や、フランスでの抗議運動など、その後も不安定の波は、広がっている。

こうした状況を見る時、思い出されるのが、いわゆる発展途上国の姿である。これまでは、いわゆる先進国は、発展途上国の模範であって、発展途上国は、先進国から学ぶのが当たり前であると、考えられてきた。しかし、日本を含めて、先進国の民主主義は、しばしば、機能不全を起こし、ただ対立するだけの状況も発生している。もはや、お手本などという意識は、どこかへ消えてしまっている。先進国が、発展途上国に近づいているかのようである。

このような状態を予想していたかと思われるような考え方がある。「ブラジル化」の理論である。この場合、「ブラジル」というのは、象徴的な意味で、ブラジルで起こるような混乱状態が、先進国でも起こるという意味で使われている。従って、「ブラジル化」の理論によれば、我々は、今までとは、違ったものの見方を要求されるのである。

* 本学現代教養学部非常勤講師

そこで、ここでは、早くから、「ブラジル化」について検討している、ウルリッヒ・ベックと、マイケル・リンズの二人の論考を追いかけてながら、「ブラジル化」の持つ意味について考えてみたい。手順としては、まず、ベックの「ブラジル化」の背景についての理論的な検討から入って、次に、リンズの描く、アメリカの「ブラジル化」への道とその現状についての分析を見ていくことにする。特に、リンズの主張は、しばしば、ポピュリスト的に見えることがあるが、その分だけ現在の状況の理解に新しい手がかりをくれるのではないかと考えられる。

2 ウルリッヒ・ベックの「ブラジル化」の理論

ベックの使う西欧のブラジル化の意味は、西欧がブラジルようになっていくということである。しかし、ブラジルになるとはどういうことなのか。ここでは、まず、ベックがブラジル化ということで何を言おうとしていたのか、前提となる部分について検討しておきたい。

西欧のブラジル化とは、自由貿易というネオリベラル的ユートピアの望んでいない結果であるという (Beck 1999: 7)。では、何故ブラジルなのか。それは、次のようなことによる。ベックによると、この後の発展の予測として問題となるのは、情報労働の内容的な様相だけではなく、いわゆる先進国といわれる発展途上国における賃金労働の発展の見取り図が、新たに、類似性を示していることである。別の言い方をすると、フル雇用社会という西欧の砦の中に、安定しない、非連続的な、断片的な、非公式的なものが侵入して来ている。それにより、西欧の中心で、南米的な、労働形態や、バイオグラフィーの形態や、人生の形態の持つ多様性、見渡しづらさ、不安定さが、社会構造のつぎはぎとして広がっていることである (Beck 1999: 8)。

ベックによると、ブラジルのような半分産業化された国では、公式化されたフルタイムの労働関係において賃金や給与に依存している雇用者は、経済的な活動の少数派しか代表していない。雇用者の多数派は、安定しない就業条件で働いているのである。彼らは、いわば、「労働の遊牧民」であり、様々な活動の場であったり、雇用形態であったり、または、職業教育の間を、行ったり来たり揺れ動いている。この遊牧民的な「マルチな活動」は、これまで西欧では、ほとんど女性労働の目印だったものである。しかし、もはや、このような活動は、「前近代的な遺物」ではなく、西欧の後期労働社会の、急速に広がりつつある発展の一種となっているのである (Beck 1999: 8)。

このような変化の背景にあるのはベックの主張するリスク社会への変化である。ベックによると、より多くの労働関係が「規制緩和」され、「フレキシブル化」されることによって、より素早く、労働社会がリスク社会へと変化して行く。それにより、個人の人生の送り方にとっても、国家や政治にとっても計算できなくなるような状態が生じることになった (Beck 1999: 10)。そして、この時、特有の不安定さが、見かけは上手くいっている中流を含めて、多数派の人間の生活世界や生活の基礎を、将来、特徴づける指標となるのである (Beck 1999: 10)。

このような不安定さの下では、社会の外見も大きく変化して行く。社会の不明瞭化が進んで行くことになるのだが、すべてが不明瞭になって行く訳ではない。ベックは、とりわけ、上層の上層と下層の下層で明瞭さは増して行くと考えている。特に、下層の下層は、下層というよりも外部となってしまふ (Beck 1999: 10)。そして、その二つの間で、社会の様々な不明瞭さが展開し、混じり合い、複雑になっていくのである。別の言葉で言うと、人々は、ますます、貧困とも金持

ちとも言えない、間のカテゴリーで生活するようになるのである。

ベックによると、プロレタリアとブルジョアの階級社会では、あれかこれかの文化が特徴だったのに対し、不明瞭さが社会構造となった社会では、あれもこれも文化が特徴となると言う (Beck 1999: 10)。これをもっと具体的にいうと、上層と下層は、はっきりとは分極せず、新たに、ある視点による金持ち、乃至は、ある視点による貧乏、或いは、一時的な金持ちというように一部で重なり合い、混じり合っていく。また、それに応じて組み合わせられた実存の形態へと変化するのである。その結果、「社会のほとんどの状況において不明瞭さが支配していくこと」(Beck 1999: 10) になるのである。

ベックは、ブラジル化という言葉に含まれている、ロマンティックな像については、自己批判的に、注意を喚起している。ここでは、我々が考えているような、問題があるのに何故か何とかなる不思議な国ブラジルというようなイメージではなく、現実のブラジルが問題になっているのである。

ベックが、ブラジル化のテーゼを提出するのは、そのようなステレオタイプの形成に対抗して、「進歩の無秩序」を明らかにすることである (Beck 1999: 96)。ここで問題になるのは、例えば、賃金労働の形態についてである。賃金労働形態の発展は、共通の、ほとんど普遍的な特徴を示すのか。それとも、この特性は、文化的なコンテキストによって変化するのかということである。ベックは、ブラジル化について語ることは、西欧的な労働社会の徹底が、(それらと同じ、公式化、法制化、そして経済セクターのヒエラルヒー化の程度を持った) 普遍的な過程と言う想定からの離脱を実行することだという (Beck 1999: 96)。というのは、産業化のプロセスは、それがどのような社会的枠組みの中に埋め込まれているか、また、どのような政治的な結果が、それと一緒に現れるかについて、決して、決めてしまう訳ではないからだという。すなわち、雇用や収入の構造のあり方も、移動や、労働の規制や、利益の組織化の形態も、自動的に決められるのではないのであり、これらは、産業化を進展させる文化的な条件や行為者に、依存しているのである。

従って、ベックは、ブラジル化の理論で、西欧的普遍主義から離脱を、南アメリカ普遍主義へと逆転させることを意図しているのではないし、労働の非公式化が、再び、一般的な発展傾向となると宣言しているのではない。それは、明白な誤解だと言っている (Beck 1999: 97)。ヨーロッパと南米における非公式的な労働の文化的なコンテキストや意味は、家族や国家の役割、賃金労働の扱いなど、中心的な次元において全く異なっているからということである。

不安定なものが、いわゆる先進国と発展途上国の間で驚くほど類似したとしても、それぞれ全く別の歴史的な背景や今日的な原因、活力などが元になっていることは、当然、気をつけなければいけないのである。例えば、両者で似たように思われるものも、ベックの指摘によれば、ヨーロッパの場合、労働権、生活水準、社会的安心の解体を意味している。モデルネに到る道はたくさんあるし、同様に、失敗する道も同じくらいあるのである (Beck 1999: 97)。すると、ここで、二つのタイプの現象を区別しておく必要が出て来る。一つは、既に強調したように、発展の違いと発展の対立は、進化論的な解明ではなく、「異なったモデルネ」の表現形態として研究し、認識されなければならないということである。しかし、もう一つは、対立的な文化発展にもかかわらず、驚くことに類似性を示すような発展である。ベックによると、アメリカやヨーロッパのブラジル化のテーゼは、これらの、異なった文化発展や近代性の考え方のパラドックス的な類似性

の質を主張しているのである（Beck 1999: 97）。

ベックが、ブラジル化の理論を提出する背景には、以下のような、大きな危機感が感じられる。ベックによると、ユーロの実験は、古典的な意味でのフル雇用のもう元に戻すことのできない喪失とともに、ヨーロッパの自明性や政治的な戦後プロジェクトがどうなるか分からないという、その瞬間に始まっているという（Beck 1999: 10）。もし、グローバルな資本主義が、西欧の国々で労働社会の価値の中心を溶かしてしまうなら、資本主義、社会国家、民主主義の歴史的な連合は崩壊してしまうことになる。すると、利益のみを目指し、従業員、社会国家、民主主義を排除する、株主資本主義は、それ自身の正当性を放棄することになる。ベックによると、ネオリベラルのユートピアは、民主主義的な無知蒙昧であるという（Beck 1999: 11）。何故なら、市場は自分の正当化を自分の中に持っていないからである。このような経済のやり方は、物質的な安定性、社会的な権利、民主主義、すなわち、民主主義国家との相互作用において生存可能なものであって、自由な市場にだけ賭ける者は、民主主義とともに、結局は、1998年秋の、アジア、ロシア、南アメリカの国際金融市場での混乱のように、この経済のやり方を破壊してしまうことになるのである。

そこで、このような時代だからこそ、我々は、ブラジルを始めとした南米諸国に学ぶことができるのであろう。ベックは、西欧で、教える社会から学ぶ社会への移行が行われていると強調している（Beck 1999: 97）。ベックによると、西欧のブラジル化のテーゼにとって決め手となるのは、多くの文化的な相違や比較の不能があっても、西欧で始まった、非公式的なものの未来は、南アメリカでは長い伝統を持っていて、それ故、多くの曖昧さにもかかわらず、そこで既に見られる、ということなのである（Beck 1999: 98）。

だが、比較のためには、ブラジル化の現実を知っておく必要があるだろう。そこで次ぎに、ブラジル化の現実をアメリカを例にして検討してみたい。特に、ベックより前に、ブラジル化という言葉を使い始めたマイケル・リンドの分析は、癖は強いが独特なので、検討する価値があるだろう。

3 マイケル・リンドの「アメリカのブラジル化」

始めに指摘しておくが、マイケル・リンドの主張には、ポピュリスト的なものも多い。しかし、それだけに、今、ポピュリストの時代に彼の主張をもう一度検討してみることは、意味があると思われる。アメリカでのポピュリスト的な不満が、どのような所からでて来るのか、彼の分析の中には手がかりが多いからである。

マイケル・リンドは、自分の立場を、リベラルナショナルだと言っている。その意味する所は、以下で見るように、保守派ではないが、現在正統派とみなされているリベラル派とも立場をことにするということである。

マイケル・リンドの分析の基本にあるのは、アメリカは、白人の上層階級によって支配されているという主張である。政府、ビジネス、慈善、メディア、教育の中心組織において、ほとんどすべての責任のある地位にいる個人は、生まれによるか、比較的少数の場合、業績により、リンドによれば、驚くほど同質的な少数支配者の一員である（Lind: 100）。ここだけ見ると、よ

くある陰謀論との違いは分からない。リンドもその辺りは意識していて、自分の説は、リベラル派のいう人種主義者の勢力や、保守派のいうリベラルな新しい階級の代わりに、白人上層階級を悪者に置き換えていることは、否定している (Lind: 102)。彼の上層階級理論は、操り人形のように、政治、ビジネス、文化の権威のある人を操作する、かくれ人種主義者や、或いは、新しい階級のリベラルという、影のような、背景にいるエリートが存在を想定はしていないという。そうではなく、アメリカにおいて責任のあるように見える人々は、実際に責任がある。アメリカは、実際に、豊かで、物腰の柔らかな、高い学歴の白人管理職や専門職の人によって運営されているというのである (Lind: 102)。

リンドによると、アメリカは、二つの国家のようなものに分割されているという。人口でいうと上位の5分の1の人と多数派を形成する残りの5分の4の人間には境界がある。さて、このギャップは、単なる収入の異なるグループ間のものだけでなく、世界観のものでもあるという。リンドによると、豊かで、高度の教育を受けた、世俗的なリバタリアンの小さくて、ほとんど排他的な白人の国が、そのメンバーは、宗教的で社会的には保守的で、経済的な問題にはポピュリスト的な見解を持つ傾向のある、主には白人的で、黒人やヒスパニックの要素も持った大きな国を支配しているのである。そして、5分の4の多数派の見解は、国内の政治的議論の中にほとんど表現されることはないという。何故なら、「左派」、「右派」、「中道」というのは、ほとんどの場合、単に白人の上層階級内での派閥のことであり、そのメンバー達の議論は、彼らの共有しているコンセンサスを実行する際のディテール的な問題に限定される傾向があるからである (Lind: 100)。

この白人上層階級の支配がどのようにして確立していったのかという原因についての分析も、リンド独特のものなので、次にその点について検討してみよう。

3-1 リンドによるアメリカの時代区分

アメリカの憲法は1787年に制定され、また、二大政党は、1860年代以来同じ名前を使い続けているように、アメリカにおいて、独立戦争と南北戦争が大きな契機であったことは間違いなさだろう。しかし、リンドは、アメリカには三つの本物の革命があったと考えていて、三つ目の革命は、1950年代から1970年代にかけての公民権革命であるとしている (Lind: 11)。そして、この三つの革命に合わせて、三つのアメリカの「共和国」があったと考えていて、それぞれを、アングロアメリカ (1789-1861)、ユーロアメリカ (1875-1957)、そして多文化アメリカ (1972-現在へ) とよんでいる (Lind: 11)。

リンドは、それぞれの共和国を次のように説明している (Lind: 11-12)。

アメリカの最初の共和国である、アングロアメリカでは、ナショナルコミュニティは、アングロサクソン、或いは、アングロジャーマン的な住民の要素と同一視され、市民宗教は、プロテスタント的キリスト教、政治的信条は連邦制共和主義とされていた。二十世紀の中頃にピークを迎えたという第二の共和国、ユーロアメリカは、南北戦争と再建時代に作られた。第二共和国の一般的なコンセンサスによると、「真のアメリカ人」になるには、ヨーロッパ人の子孫であり、宗教的にキリスト教徒 (プロテスタント、或いは、カトリック) である。また、連邦的共和主義は、連邦的民主制の信条へと変更されている。

第三の共和国は、現在のアメリカのことである。多文化アメリカは、1950年代から1970年代の公民権革命の混乱の中から生まれている。それは、白人の優位が暴露された、肌の色を意識しない始めの段階では、ニューディールのリベラルたちに指導されていた。しかし、彼らは、第二の段階でコントロールを失っていった。リンドによると、その段階で、人種の集合意識と人種優遇プログラムの勝利が見られたという。リンドの評価では、人種のクラス分けの法律や政策を排除し、中産階級に、恵まれない人々が含まれるように拡大するという試みとして始まった革命は、皮肉にも、人種を意識した政府の再生と経済的保守主義の政治的勝利で終了したのである。そのため、リンドのいう多文化アメリカは、肌の色を意識しないリベラル達が、60年代の初めに意図した第三共和国ではなくて、後から、ブラックパワーの急進主義と白人の反発による保守主義との交差から生じた第三共和国のことなのである (Lind: 12)。

リンドの特徴的な主張は、明らかに国民国家であった第一と第二のアメリカ共和国とは違って、第三の共和国では、首尾一貫したアメリカの国民共同体は存在しないということである。そのかわり、白人、黒人、ヒスパニック、アジア人と太平洋の島民、ネイティブアメリカンという、人種によって定義された五つの国民的共同体が存在しているというものである。また、それに関連して、市民的宗教というべきなのは、個人が、自分の特定の、人種的、性的、宗教的サブカルチャーと一致することを強調する本来性の理念となり、ポスト 60 年代のアメリカの政治的信条は、領土的な連邦主義からワシントンを中心にした、ある種の人種の連邦主義へ変化したのである (Lind: 12-3)。

多文化アメリカは、それ以前の二つの共和国に共通していた、白人の優位の拒否の上に立てられてはいる。しかし、リンドによると、そこでは、肌の色を意識しないリベラリズムではなく、政府の官僚制によって非白人と公式に明示された市民のための、人種優遇の複雑なシステムが重要視されるようになっていった。その結果、教育、雇用、契約、選挙区の区割り変更などで人種優遇が行われ、その恩恵は、アメリカの白人優位に苦しめられた人々の子孫だけではなく、ラテンアメリカ、カリブ海、アジア、インド亜大陸から来た最近の移民も手にすることが出来るようになっていたのである (Lind: 13)。

3-2 白人上層階級と多文化アメリカ

リンドは、現代アメリカを多文化アメリカと捉えているが、上記のように、多文化アメリカを評価していない。では、何故、多文化が問題になるのだろうか。一般に、多文化主義は、リベラル派の主張と考えられているので、普通に見れば、アメリカで多文化主義が進んだのは、リベラル派の勝利ということになる。しかし、リンドによれば、保守派も、戦術的な理由で、リベラル派と同様に、始めから人種優遇政策の推進に助力していたのである (Lind: 13)。

リンドが挙げるキーパーソンは、先ず、元大統領の、リチャード・ニクソンである。ニクソン政権は、全労働者における人種のクオータの強制を行ったのだが、本音は、労働組合に組織された白人労働者を黒人労働者に対して戦わせるためだったという。また、レーガン及びブッシュ(父)政権の時代に、人種的にゲリマンダー化された国会議員選挙区、すなわち、意図的に非白人が多くなるように調整された選挙区が作られ、非白人が当選しやすいようになった。しかし、別の多くの選挙区では、民主党支持者の多かった黒人やヒスパニックの有権者の票が大きく減ることに

なったのである (Lind: 13)。リンドによると、政治や職場における、上記のような、人種優遇プログラムは、実際は、右派を助けていると主張することもできるという。いわゆる、体裁主義は、同質的なアメリカの社会的、経済的エリート、すなわち、白人の上層階級が、アメリカの残りの多数派の中の人種的な分割によって利益を得る、分割統治政策のシステムに、それらしい、「進歩的な」カモフラージュを提供したというのである (Lind: 13)。

そのため、多文化政策は、元の意図とは異なり、アメリカ社会に負の影響を与えることになってしまったというのである。リンドによれば、賃金労働している白人、黒人、ヒスパニック系アメリカ人を、人種の線引きにより政治的にも分割したこと無しには、今の世代のアメリカの白人上層階級が、労働組合を破壊し、給料を減らし、労働者の給付を減らし、フルタイムの労働者を非正規労働者で置き換え、課税の負担を富裕層から中産階級や労働者階級へ移転するという彼らの議題を、大した効果的な民衆の反対もなくやり続けることが出来たのか、疑わしいのである (Lind: 14)。

リンドの分析によると、多文化的なアメリカは、もともとリベラルでもないし、もともと保守的でもない。アメリカの第三共和国は、ニューレフトとニューライトの、言葉の上での急進主義と現実的な金権政治の、また、分割統治的な多文化主義と安い労働力を求める経済的グローバル主義とのグロテスクな統合なのである (Lind: 102)。すると、結局、多文化アメリカの枠組みは、支配的な階級である、白人上層階級の政治的、経済的な利益に役立っていることが重要なのであって、その限りで安定的である。だから、人種の優遇が、上層階級のアメリカ人の仕事や収入を脅かすなら、これらの優遇はすぐに廃止されてしまうし、白人の上層階級のメンバー自身が、大規模な移民や外国貿易の代償を支払わなければならなくなれば、人々や品物に対して、国境は素早く閉じられてしまうことが予想される。逆に、白人上層階級のメンバーは、人種の優遇と経済的グローバル主義の社会的コストを、人種に関係なく、中層階級に移転できる限りは、この政策を変更する動機はないのである (Lind: 102)。

多文化アメリカの枠組みが、白人上層階級の利益を守る一方で、人種に関係なく、アメリカの多数派の収入は減少するなら、豊かで、政治的に支配的な白人の少数支配に対する敵意は拡大するというのが、リンドが予想するアメリカの将来である (Lind: 14)。リンドによると、アメリカの本当の脅威は、人種の線引きにそった断片化であるバルカン化ではなく、前述の、階級の線引きに従った分裂であるブラジル化なのである (Lind: 14)。ラテンアメリカと同様に、アメリカでも、発展途上国並みの不平等と犯罪の一方で、上層階級は、豊かに繁栄するという不条理な状況が生じているのである。以上のことから、アメリカで問題になっているのは、一見すると、人種問題のようだが、本当に問題なのは階級間の不平等であるというのが、リンドのブラジル化のテーゼの含意なのである。

ベックが言うように、ブラジル化の理論が学習するためのきっかけであるなら、アメリカについてもっと見ておくことは、重要であろう。そこで以下では、リンドのアメリカのブラジル化についての具体的な分析について検討していこう。

4 アメリカのブラジル化の諸相

4-1 人種的なラベル張り与人種的優遇を中心に組織化した社会

リンドは、それぞれのアメリカの共和国を、ナショナルな共同体の考え方、共通の倫理、政治信条の三つの観点から比較しているが、多文化アメリカの場合、それぞれ、公式的な、白人、黒人、ヒスパニック、アジア人と太平洋の島民、ネイティブアメリカンという、五つの人種に対応した、五つのナショナルコミュニティ、自分の公式的な人種文化に一致することを支持する、本来性の倫理、国家による権利のかわりに人種による権利がくる、新しい種類の連邦制を挙げている (Lind: 118). そこで、これらがそれぞれ、実際に、どのようなものなのか、次に検討してみよう。

4-1-1 人種によるコミュニティ

先ず始めは、ナショナルな共同体の考え方についてである。リンドのいう、五つのナショナルコミュニティとは、上記の五つの公式に認められた人種によるコミュニティのことである。では、何故五つなのだろうか。リンドによると、アメリカの五つの人種への公式的な分割は、人種優遇的な支援システムを際限なく拡張しようという、リベラルな民主党員の願望と、いくつかの比較的大まかなカテゴリーで済ませたいという連邦の官僚たちの願望との衝突の結果だという (Lind: 119). すると、この人種のカテゴリーは、文化的な現実を反映したのではなく、政治的、官僚的な必要を反映したものであるので、恣意的なものでしかない。

例えば、ヒスパニックである。リンドによれば、1970年代以前のナショナルセンサスにおいて、ラテンアメリカ出自のアメリカ人は、白人と規定され、ほとんどではないにしても、多くのメキシコ系アメリカ人は、自分たちを、白人の人種グループと考えていたという。リンドは、また、メキシコ系アメリカ人に対する法律上の分離や権利剥奪は決して無かったと断定している (Lind: 116)¹⁾。しかし、人種優遇のプログラムに参加する為に、人種の再定義が行われ、ヒスパニックという、リンドによれば、疑似人種が作り出されてしまった。そのため、様々なカテゴリーの人が含まれてしまい、何世代にも渡ってスペイン語を話していないような家庭出身の人々でも、ヒスパニックに含まれる事態になってしまっているのである。

多文化アメリカでは、(ヒスパニックも含めた) 公的に指定されている非白人は、様々な、正式で法的な特権の恩恵を受けている。基本となる想定によると、公式に認められた五つの人種のうち四つが、五つ目のもの、つまり、ヒスパニック以外の白人によって、同じように一律に抑圧されているからだという。そのため、白人には何も残らない。リンドは、ヒスパニック以外の白人は、集団としては何か特別な権利を持たないだけでなく、彼らに対する明らかな差別を受けていると批判している (Lind: 120). そのような事情から、以前とは逆に、多くの白人が、黒人や、ネイティブアメリカンや、ヒスパニックの先祖を持ち出すことにより、人種優遇を利用しようと試みるようにすらなっているというのである。

4-1-2 本来性

そうなると、人種という考え方を支えるものは何か、ということになる。そこで出てくるのが、本来性の理念である。リンドによると、本来性の理念とは、本当の自分と自分の公式のサブカル

チャーとの同一化を想定することで、公式の五つの人種のうちの一つの基準に従うことを意味する (Lind: 123). すると、人種とは、あるサブカルチャーへの帰属ということになり、自分を見つけるには、ただ自分のゲッターを見つけ、そのやり方を採用すればいいということなのである。

しかし、リンドは、一度人種が官僚的な法令によって発明されてしまうと、今度は、それに一致するような文化を発明することも、比較的簡単だとしている (Lind: 124). 例えば、ある調査によると、ラティーノのアイデンティティやラティーノの政治的組織の拡大は、ヒスパニックのための雇用促進計画が促進したのだという (Lind: 124). また、リンドは、アフリカ系アメリカ人の場合も、統一したアフリカというナショナリティーが存在しないことを指摘している (Lind: 126). アフリカ系のアイデンティティも、後から、アフリカの外の人々によって構成された何かでしかないことになる。

4-1-3 人種による連邦主義

多文化アメリカにおける政治理念は、多文化民主主義である。リンドによると、多文化アメリカで、意味を持つ区分は、地域的な区分ではなく、人種的な区分となる (Lind: 127). 国のどこかで近所に住む白人と黒人は、お互いよりも、別のどこかに住んでいる同じ人種の方が共通するものが多いという考えである。この考え方を実行に移すなら、連邦制ではなく、全国を対象とした比例代表制か、人種ごとの選挙にする必要がある。しかし、リンドによると、多文化アメリカの建設者たちは、結局、連邦憲法の枠内での多文化主義で満足するしかなかったという (Lind: 127).

では、多文化主義は、そもそも、どこから出てきたのだろうか。リンドによると、人種優遇策は一定の成果を上げたが、そのため、1990年代までに、人種優遇のための新たな理由付けが、求められることになったという。そこで出てきたのが、多文化主義、或いは、多様性という理想なのだという (Lind: 130). 文化の多様性、人種の多様性は、いいものとして賞賛されるのなら、人種優遇システムは多様性を推進する手段と理屈づけることで、存続が許されることになる。そして、多様性を強調するなら、人種優遇の特権を、実際に差別を被っていない人にも永続的に拡大できるのである (Lind: 131). しかし、そうなると、ラテンアメリカやアジアからの大量の移民のせいで、人種優遇の利益を受けることのできる集団は、急激に大きくなっていく。特に、ヒスパニックが、人種優遇の保護の最大の受益者となることは、容易に予想できることであろう。

このような多文化アメリカの比喩として、異なった民族や人種の集団が、自分の明らかな特性を維持しつつも、全体として混じり合う、サラダボウルが使われることがある。しかし、リンドが、大衆が人種という線引きで分割されていると見ていること (Lind: 137) にも注意しておかなければならない²⁾。

4-2 白人上層階級

それでは、リンドのいう白人上層階級とはどのような人たちなのだろうか。次にそれを見ていこう。

白人上層階級のメンバーの一つの特徴は、過去の地域的なエリートと違って、彼らが、現在、たまたま暮らしている地域とすり結びついていないことだという。リンドによると、白人上層階

級は、同質的で、遊牧民的で、アメリカの歴史の中で始めての本当に全国的なエリートである (Lind: 143)。また、白人上層階級は、単なる、以前の時代のエリートの結合ではなく、資産家と経営者、専門職階級との融合の産物だという。アメリカでは比較的新しい展開として、そこでは、上層と中流上層階級の曖昧化が生じているという。リンドによると、アメリカの上層階級の相続による構成員は、裕福な、経営者、弁護士、投資銀行の経営者のモデルになる代わりに、すぐ下の構成員である上層中流階級と一致する傾向があるという (Lind: 144)。

白人上層階級の倫理的、政治的世界観でも特徴がある。リンドは、彼らは、社会的な問題ではリベラルで、経済的な問題では保守的であるという。他方、アメリカの多数派は、対照的に、経済的にはポピュリストだが、性的、美的な問題では相対的に保守的であるとしている。それ故、リンドは、階級を土台にしてアメリカの住民が二つの党派に分けられるとするなら、もはやリベラルと保守ではなく、リバタリアンとポピュリストであるとしているが (Lind: 149-50)、注目すべき点であろう³⁾。

では、白人上層階級は自分たちの権力をどこから得ているのだろうか。リンドによれば、アメリカの制度的エリートのほとんどが、一つの社会階級、白人上層階級の出身者で占められているのである (Lind: 143)。そして、その地位を守るために、白人上層階級は大学入試や、職業参入に壁を作り、政治資金の提供などで自らの優位を固めているという。次にこの点を見ていこう。

例えば、アメリカの経済エリートは、資本家のエリートではなく、給料の他、ストックオプションや手数料などで生計を立てている経営者や専門職である。そのため、リンドによると、現代の経営者資本主義社会において、重要な区別は、もはや、「ブルジョア」と「プロレタリア」ではなく、専門家階級と働いて賃金を稼ぐ階級となっているのである (Lind: 151-2)。

しかし、この専門職と賃金労働者の間には、「ブルジョア」と「プロレタリア」のように、簡単に乗り越えることはできない壁が作られている。アメリカの教育における階級バイアスは、最下層から最上級のレベルまで一貫しているからである (Lind: 152)。リンドによると、ほとんどの名門の私立大学への入学は、かなりの程度、家族の収入に依存するだけでなく、卒業生子弟の優遇というコネにも依存しているのである (Lind: 153)。

それに加えて、別の障壁もある。経営者エリートへの門を守る次の障壁は、専門職の資格システムである。例えば、法学の学位を得るには、多額の投資と時間が必要であるが、お金と時間の無い者には始めから無理な要求である。また、ビジネスでも、同じように、素早い出世には、大学院での訓練が要求されている。それ故、リンドによると、専門職の資格の承認を規制している法律は、経営者専門職の少数支配の階級利害を、さらに保護しているのである (Lind: 153)。

さらに、リンドによると、白人上層階級は、アメリカの政策を、選挙資金の供給や、鍵となる連邦部局、特に、行政や法律部門の部局へのスタッフの派遣での有利な立場を通じて支配している (Lind: 156)。特に、選挙資金の供給は、今までのところ、政府への上層階級の影響の最も重要なメカニズムとなっている。政治家の、少数の高額寄付者への依存は、低い投票率や上院議員の不平等な配分と相まって、国の政治を豊かな白人に有利な方向へゆがめているのである。

同様に、白人上層階級は、人種優遇政策も自分たちの地位を固める為に利用している。リンドによると、白人上層階級は、人種優遇の機構を使って、反対派のリーダーになりそうな黒人を懐柔しようと試みてきている (Lind: 161)。その結果、黒人中層階級とヒスパニックの政治家や社

会運動家のエネルギーは、貧しい人のための煽動から、自分自身の人種や階級のメンバーをまとめて代表するという権利を守るための、自己利害的な努力へとそれていってしまっている。白人上層階級は、民族的分断と懐柔によって、大衆に基礎をおいたポピュリズムの根をたつことで、社会的平和を買ったのである。リンドによれば、その方が、低賃金者の生活改善のために、アメリカの政府やビジネスの改革に取りかかるよりずっと容易だからなのである (Lind: 163)。

リンドは、人種優遇策同様、女性のクォータ制も差別改善には役立っていないと不満を述べている。例えば、エリート大学の新入生のクラスに女性のクォータがあるなら、そのクォータは、下層中流階級の女性、労働階級の女性、貧しい女性ではなく、白人上層階級に属する家庭出身の、よりよい教育を受けた女性によって埋められてしまうからである (Lind: 170)。雇用におけるクォータでも、教育と同様、主に、それらを最も必要としない、裕福なアメリカの黒人やヒスパニックが利益を得ているのである (Lind: 171)。

リンドは、リンドの規定するアメリカの白人上層階級が、様々な障壁を作ることで制度的エリートの座を独占していると主張しているが、その際、一見すると格差を解消するように見える制度すら、白人上層階級の地位保全に使われているという現実は、注意する必要があるのではないだろうか。

4-3 上層階級による階級戦争

リンドは、1960年代以来、アメリカ社会を変質させているのは、二つの明らかに矛盾する傾向であるとしている (Lind: 181)。政治的左派と関係づけられる人種優遇政策の生活の様々な領域への拡張と、保守的と人が考えるような、ビジネスに好ましく、労働者に好ましくない政府の政策である。しかし、実際には、現代アメリカの、左翼の公民権政策と右翼の経済政策の間にはそれほど矛盾はないのではないか。リンドによると、人種優遇と自由市場経済保守主義の両者とも、新しいアメリカの少数支配者、白人上層階級の利益に役立っているからである (Lind: 181)。

リンドによると、1960年代以来の人種優遇や、それを正当化する多文化イデオロギーは、アメリカの階級分断から注意をそらし、人種的文化的なつまらない論争へと注意を向けさせる効果を持っていた (Lind: 182)。それは、本来、幅広いリベラルな連合の自然な構成要素である、白人、黒人、ヒスパニックの賃金労働者間の分断をもたらし、白人上層階級のメンバーにとって、自分自身の狭い経済的な議題を、他のほとんどのアメリカ人の負担で追及するのを容易にしたのである。リンドによれば、ポスト 60 年代のリベラルと保守は、現代アメリカの資本主義の取り決めや結果について質問しないで、ほとんど象徴的な問題についてのみ熱心な議論を許すという、暗黙の合意を共有していたのである (Lind: 188)。

中流階級と労働者階級が人種優遇やその他の象徴的問題をめぐる分断していることは、決して彼らのためにはならなかった。リンドによると、上層階級で占められた二大政党のエリートは、その間に、中流階級に対して、三つの戦線で、何世代にも渡る階級戦争を進めていたからである。この三つの戦線とは、逆進的課税、自由市場グローバリズム、新しい封建主義の三つのことである (Lind: 188)。それでは、この三つについて検討していこう。

4-3-1 逆進的課税

リンドのいう最初の戦線は、累進的から逆進的課税への変更をめぐる動きである。政党の衰退と選挙運動にお金をかけることの重要性が増大したことにより、選挙資金を提供することのできる上層階級への政治的権力の集中が進んでいった、しかし、その分、税の負担は、上層階級から多数派へと再配分されていったのである（Lind: 188）。

始まりは、ロナルド・レーガンが、大統領の時代だという。ロナルド・レーガンは、税率が大幅に下げられれば、政府の税収は上昇すると選挙戦の時から主張していた。この減税により、経済エリートは、中流階級や貧者よりも政府からの恩恵を手に入れることになった。他方、この間、最低賃金は、据え置かれている。そうすると、豊かな人へ形を変えた寛大な支出があった一方で、リンドによると、低賃金労働者にとっては体の良い賃金の削減が行われていたのである（Lind: 190）。

さらに、減税により財政の悪化が進んだが、その負担は、下の階層が負うことになった。レーガン及びブッシュ（父）政権の下で、拡大し続ける政府への支払いの重荷は、社会保障給与所得税の増加、州税と地方税の上昇、赤字の補填という三つの手段によって、金持ちから、中流のアメリカ人に移し替えられてしまったのである（Lind: 192-3）。その結果、累進的な所得課税は、逆進的な社会保障課税と置き換えられ、州レベルでは、企業の税の支払いが減少する代わりに、公共料金のような逆進的な個人への課金が上昇するなど、平均的なアメリカ人は、金持ちの代わりに課税されることになったのだが、さらに、金持ちの減税による負債の返済のためにも課税されることになったのである。

4-3-2 自由市場グローバリズム

次に、問題になるのは、グローバルな自由貿易である。リンドは、アメリカの収入格差の拡大のほとんどは、労働組合の衰退と自由貿易という二つの要因によって動かされているとしている（Lind: 195）。

労働組合運動の弱い所では、賃金格差が大きくなるのは、当然である。アメリカでは、労働組合の組織率が下がっているので、賃金格差が大きくなったと言えるだろう。リンドによると、アメリカで格差が拡大している大きな理由は、ビジネスや専門家階級が、弱者の保護やアメリカの労働運動を弱体化させるのに成功したからなのである（Lind: 196）。

しかし、リンドは、グローバルな自由貿易の方に、格差拡大のより大きな比重があると考えている。

現代アメリカの、政治やマスコミの上層部は、グローバルな自由貿易で大きくはない移転や損失があるだろうが、長期的には、アメリカは豊かになるだろうと主張している。だが、リンドによると、真実は少し違うと言う。経済先進国の生活水準の高さは、自然なものではなく、自由市場資本主義を「社会市場」資本主義で置き換えるという、中流階級の労働者に有利なような政策によって達成されたのである（Lind: 196）。ただし、この政策は、政治及びビジネス階級の側の利他主義ではなく、社会の平和を守るための方策としてであった（Lind: 197）。従って、現在見られる社会市場資本主義の崩壊は、警告を意味しているのである。

既に、20世紀半ばには、先進国の社会市場資本主義には、大きな圧力がかかるようになって

いた。原因としては、オートメーション化、人口の高齢化、低い生産性の伸びなどが挙げられるが、リンドによると、大きな理由は、低賃金国との経済的競争の拡大である (Lind: 197-8)。多くの企業は、低賃金、低保障で、或いは、保障無しで、しばしば、政治的、法的権利を持たない、比較的スキルのある労働者を利用するため、自国での設備を閉鎖し、海外に工場を開いたり、海外の工場から買うようになった。そのため、この経済的競争は、国をまたいだ階級戦争の様相を呈するようになった。

このような状況に関して、アメリカの労働者のスキルや生産性が向上する限り、アメリカは、グローバルな自由貿易から利益をうるという主張がある。しかし、リンドによるとアメリカでは、生産性は上昇しているが、アメリカ人労働者の賃金の増加にはつながっていないという (Lind: 200)。生産性が高くなれば、同じ仕事をするのに労働者は少なくてよくなるし、生産性が上昇しているのは、技術的革新の結果であって、労働者の教育によるものではないのである。さらに、どれほど生産性が上がっても、少なくなった仕事を競争する多くの労働者がいれば、賃金は減少してしまうのである⁴⁾。

もちろん、グローバル経済で、すべての仕事が国外に移転できる訳ではないので、多くの低スキルのサービスは、なおも、アメリカのその場所で行われなければならない。そこへ移民がやって来る、とリンドは言う (Lind: 206)。気前のいい、移民政策は、アメリカ人の所有する産業の国外移転による労働者予備軍の拡大と同じ効果を持つことになる。つまり、賃金は低く、労働組合は弱くなるのである⁵⁾。

しかし、マスコミは労働者の味方ではない、大多数のアメリカ人が移民のレベルの縮小に賛成しているのに、権威を持ったマスコミは、一致して、高いレベルの移民に賛成し続けている。マスコミは、ビッグビジネスの安価で、扱いやすい労働者への欲望を、黙って認めながら、移民抑制の支持者を人種主義者と非難したりもしている (Lind: 207)。アメリカの上層階級のメンバーが、今日の大規模な合法的移民の政策から利益を得る一方で、移民政策は、アメリカの多数派の人の生活水準の低下と結びついているのである (Lind: 211)。

4-3-3 新しい封建主義

白人上層階級の第三の階級戦争キャンペーンは、「新しい封建主義」と呼ばれているものである。リンドによると、新しい封建主義は、過去二千年間続いてきた、警察、公共の道、移動のネットワーク、公立の学校のような基本的な公共的なアメニティの、政府による引き受けという傾向をひっくり返している (Lind: 211)。これらのものは、再び、豊かな一部の人のみが手に入れることのできる、個人的な贅沢になって来ているのである。原因は、公共サービスの民営化である。ここで、問題なのは、学校のような公共機能、公園のような公共施設の民営化は、中流階級や労働者階級の手に入るアメニティを劇的に減少させる一方で、公共のアメニティに依存しない裕福な少数者にとってはほとんど変化がでないことである (Lind: 212)。

リンドは封建化の例として次のような例を挙げている。

1) 公立学校を納税者によって助成されたバウチャーと置き換えようという計画 (Lind: 213)。この際、金持ちの子供が通っている学校は、中流階級の子供たちを合法的に拒否することが出来る。すると、中流階級の親は、金持ちの子供が通っている学校のバウチャーを払うために、課税

されることになってしまうことになる。

2) ゲートで閉じられたコミュニティへ引きこもる白人アメリカ人の数の増加 (Lind: 213). ゲーテッドコミュニティの豊かな住民の一部は、交通遮断の許可だけでなく、税から除外される許可を求めている。地域の公共サービスへの税は、彼らの私的なコミュニティ管理組合の手数料の上に、「二重課税」をなしているからだという。

3) アメリカ軍は、他の民主主義国と違って、市民軍ではなく、既に「ボランティア」、不均等に低所得のアメリカ人、からなる報酬で雇われた軍隊である (Lind: 214).

4) 裕福なアメリカ人は、自分以外の階級や人種が恩恵を受ける、相応な税金を払うのがいやなので、アメリカの人口に対する警察官の割合は、他の西欧民主主義国と比べると低くなっている (Lind: 214). 富裕者が雇うので、アメリカの私的な警備員の数、アメリカで公共的に雇われている警官の数より多いという。

5) 国の高速道路システムの私的に通行料を取る道への置き換えである (Lind: 214).

結局、リンドによると、白人の上層階級は、平均的アメリカ人の賃金や生活の質の低下に無関心でも大丈夫なのである。というのは、そのメンバーは、「自分たちが、荒廃していく街、貧しい仕事、ぼろぼろになる郊外の公立学校、うろつく狂信者、犯罪から隔絶する方法を開発した」からなのである (Lind: 215).

5 終わりに

ベックは、ネオリベラルのユートピアの帰結としてブラジル化を考えているが、リンドの論考を検討すると、実際、アメリカでは、白人上層階級のネオリベラル的な利益の追求の結果として、ブラジル化に到ったことが分かった。また、リンドの論考の中に現れるように、今まで、当たり前と考えられていたものの意味が変わってしまっているのも、ベックのいう不明瞭化と大きく関係しているだろう。特に、リンドの、主流派のリベラルに対する批判は、現在リベラルが信用を失った理由を、よく教えてくれる。人種優遇政策やクォータ制のような格差縮小のためのプログラムが、下の層の人には役に立たず、上の階級の特権として使われるなら、リベラルな政策は信用を失うだろう。また、マスコミも、移民政策に対する態度のように、大企業の利益を優先するのなら、反発を買うことは間違いない。

こうしてリンドのいうアメリカのブラジル化の現状を見ると、ベックのいう、「利益のみを目指し、従業員、社会国家、民主主義を排除する株主資本主義は、それ自身の正当性を放棄することになる」(Beck 1999: 11) という主張の意味がよくわかるだろう。トランプ大統領の登場も、ブレクシットをめぐる大混乱も、起きて当たり前の結果だったのである。では、ブラジル化の中で我々は、どうしたらいいのか、それは、次の課題にしたい。

[注]

- 1) メキシコ系の人々の問題は、実際は、もっと複雑である。その点については、(松本 2007) を参照。
- 2) リンドによると、人種優遇と多文化主義は、二つともアメリカの白人上層階級の最大のペテンに含まれるという (Lind: 139). それらは統合の幻想を提供するが、白人の上層階級には最低限のコ

ストしか課さないからだという。

- 3) リンドによると、白人上層階級のモットーは、「左派的に考え、右派的に生きる」だという。アメリカの新しい少数支配者のメンバーは、純粋に貴族的なやり方で、彼らのリベラルな社会的見方を紳士気取りや恩着せがましさを上手く組み合わせている (Lind: 150)。
- 4) リンドは、レッセフェールのなグローバリズムは、最も急進的で、破壊的な種類の民族的ナショナリズムや経済の国家主義という形で、自分自身への報復を生みだすと言っている (Lind: 205)。
- 5) リンドは、さらに、アメリカ生まれの労働者に規律を守らせる効果もあると言っている (Lind: 210)。

[文献]

- Beck, Ulrich, 1986, *Risikogesellschaft: Auf dem Weg in eine andere Moderne*, Frankfurt a.M.: Suhrkamp. (= 1998, 東廉・伊藤美登里訳『危険社会——新しい近代への道』法政大学出版局。)
- , 1999, *Schöne neue Arbeitswelt. Vision: Weltbürgergesellschaft*, Frankfurt a.M.: Suhrkamp.
- Beck, Ulrich, hg, 2000, *Die Zukunft von Arbeit und Demokratie*, Frankfurt a.M.: Suhrkamp.
- 服部茂幸, 2013, 『新自由主義の帰結——なぜ世界経済は停滞するのか』岩波書店。
- 伊藤秋仁・住田育法・富野幹雄, 2015, 『ブラジル国家の形成——その歴史・民族・政治』晃洋書房。
- Lind, Michael, 1995, *The Next American Nation*, NY: The Free Press. (Lind と略)
- 松本悠子, 2007, 『創られるアメリカ国民と「他者」——「アメリカ化」時代のシティズンシップ』東京大学出版会。
- 酒巻秀明, 2017, 「雇用と民主主義」『東京女子大学社会学年報』5: 37-47。
- , 2018, 「労働形態の変化をめぐる4つの未来のシナリオ」『東京女子大学社会学年報』6: 35-45。
- 田所清克, 2001, 『ブラジル学への誘い——その民族と文化の原点を求めて』世界思想社。
- 堤未果, 2008, 『ルポ 貧困大国アメリカ』岩波書店。
- 和田昌親編, 2011, 『ブラジルの流儀——なぜ「21世紀の主役」なのか』中央公論新社。

Revisiting the Concept of Brazilianization

SAKAMAKI, Hideaki

The current confusion in Western countries seems to be increasing exponentially. In this context, Ulrich Beck's concept of Brazilianization may help to elucidate the problems underpinning this situation. Brazilianization refers to the process by which industrial countries come to increasingly resemble half-developed countries, such as Brazil, as uncertainty expands into the social structure of seemingly stable developed countries. According to Beck, Brazilianization is not inevitable, but avoiding it requires a change in the perspective, that regards Western countries as normative.

Michael Linds' analysis of American society will be used to illuminate the process of Brazilianization. According to Lind, the population of the United States is divided into a small, affluent, and homogeneous white overclass, which dominates contemporary society, and the remainder of the population. The white overclass does not consist exclusively of business/property owners; instead, it is dominated by executives and professionals. The white overclass makes use of multiculturalism, which originates from liberal ideas, to agitate racial conflicts; this approach succeeds in dividing the working class along racial lines despite the common interest of all working-class individuals. As a result, policies that favor of the white overclass, such as global free trade and mass immigration, have been adopted with little opposition. Lind concludes that the United States is in an absurd situation: although the standard of living of middle-class and working-class Americans is continuously declining and inequality is nearing the level of developing countries, the white overclass continues to prosper.

Keywords: Brazilianization, multiculturalism, racial conflicts